資料－３

手づくり郷土賞（ふるさと） 選定委員会

全 体 講 評

昭和６１年度に創設以来、２７回目を迎えた「手づくり郷土賞」ですが、今年度も全国各地から数多くの取組の応募がありました。応募された取組はいずれも創意工夫に溢れ、地域の方々の故郷への熱い想いと地道な努力が伝わるものばかりでした。

今回の受賞案件の中には、地域の歴史資産を住民の働きかけで保存し、地域の活性化に繋げている取組や、課題となっていた場所を新たなコミュニティの場として再生している取組、住民が結束して災害からの復興プロセスで成果を上げている取組などが見られました。いずれの活動にも、その地域ならではの多様な人と人との協働の仕組みが整えられていることが伺えました。

人口減少、少子高齢化、財政制約に加え、震災を契機とした様々な課題を乗り越えて、活力に満ちた地域社会を持続可能なものにしていくためには、地域に暮らす人々がそれぞれの地域の強みや魅力を見つめ直すとともに、それらを磨きあげていく活動を、行政や民間とも連携しながら展開していくことが望まれます。今回選定された個々の活動は地域に根ざしたものである一方で、その活動の仕組みは、他地域の課題解決へ繋がるさまざまな糸口を示してくれているのではないでしょうか。

今後も、受賞された地域において更に充実した活動に取り組まれるとともに、手づくり郷土賞の選定事例に蓄えられた叡智が活かされ、他地域でも新たな発想や工夫が生まれ、魅力ある地域づくりが全国各地で展開されていくことを選定委員会一同期待します。

選 定 委 員 講 評

西村　幸夫　委員長

永年続いてきたこの賞もこのところすっかり維持管理に力の入った案件にシフトしてきています。今年もその傾向は続きました。

大賞に選ばれた２件、竹原の町並み（広島県竹原市）と赤羽緑地のビオトープ（茨城県日立市）はいずれも長期にわたる地道な地域マネジメントの成果です。活動の中身も多彩で、多方面への広がりが感じられます。まさしく「手づくり郷土賞大賞」の名にふさわしいものだと思います。

一般部門で受賞された 16 件も大半は地域資源を細やかな視点で掘り出し、じっくりと守り育てているものです。そうした確かな目を地域住民の方々が持っておられることに敬服いたします。また同時に、こうした活動が行政とも建設的な関係を保ち、官民がそれぞれの得意分野で力を発揮することを通して、単なる官＋民の足し算を超えた力を発揮している事例が多く、こうした活動の仕組みそのものが他地区の模範となると感じます。

受賞された各地域の皆様方、おめでとうございます。皆様の不断の活動が故郷を愛すべきものとして光り輝かせることに貢献しているのです。今回の受賞がその顕彰に少しでもお役に立てればと切に願います。

荻原　礼子　委員

今回はじめての審査でしたが、多様な地域の本当にたくさんの人達に出会えたような感銘を受け、元気をもらいました。

住民の盛り上がりと行政、専門家の力がうまくかみ合って魅力的な道づくりや建物の修景を進めそれを活性化につなげているまち。多くの人の手で地域の自然や歴史資産を守ることで、地域を愛する人の輪を広げている活動。これまで目を向けられなかった港の空間などを、若い人の感性で実験的に活用し魅力を引き出している先駆的活動。などなど、地域それぞれにドラマを感じます。

その地域ならではの魅力的な環境を守る、育てる、活かすために多様な立場や世代の人が力を合わせることで、はじめて「新しい地域の自慢」と呼べるまちや場所が生まれることを、この「手づくり郷土賞」は実感させてくれます。そしてその宝が地域を元気にし、次世代を育てるというプロセスも、事例の中から追う事ができます。今回、賞を受けた事例を広く紹介していくことで、他の地域の人にも元気なまちづくりが広がって行く事を願ってやみません。

齋藤　潮　委員

言うまでもないが、書類審査は地元の現実と距離をおく審査だ。様々な活動が結局、まちをどんなふうに変え、どんな道、川、広場、公園を生み出したのかが、この距離によって横並びに概観できる。添付された写真はその結果を景観として映し出している。写真を横並びで見ると、景観の水準の違いもはっきりする。コンセプトはわかりやすいがデザインは未熟だとか、発想は面白いが受け狙いの感が強いとか。だが、写真に撮られた景観がほんものらしく見えるならそれでよい、というなら、それは、防腐処理して博物館入りさせるべきモノかも知れない、とも思う。

大事なのは景観をささえている生活や生きたしくみだ、いや、それらを全て含んで景観なのだということになると、その深いところは、少なくともわたしには書類ではわからない。書類審査の距離を取り去る・・・地元の暮らしぶり

に触れ、人々の肉声を傍受し、ついでに景観の実際を見なければ評価などできない、と思う。だが、現地で人々の苦労を知り、静かだが熱い想いに包まれたら、景観にやや難ありでも共感してしまうかもしれない。いや、むしろ、写真とおなじものでも違った景観にみえるだろう。しかし、審査は書類でおこなわなければならない。このように迷走して、結局、観念して、写真を見て景観の質が懸念されるケースについては審査会で問題提起した次第である。

佐々木　葉　委員

昨年に引き続きこの賞の審査の一翼をになう事となった。全国各地からいずれも熱意あふれた取り組みの応募があり、特に今年はその多様性に新しい期待を覚えた。と同時に、審査も難しかった。現地審査やヒアリングができない中で、応募者からの書類と事務局の確認資料をもとにまずは個別に候補を選定し、その結果をもとに議論によって審査を行う。当然の事ながら、審査にあたる委員によって何を最も重視するかは異なり、これは審査委員会として健全なことだ。それ故にこそ、応募される活動の趣旨や位置づけに幅が出てきた今回の結果を機に、改めてこの賞の意義や価値を議論していきたいと感じた。

今回の応募のなかで私が特に興味深く、また重要と感じたのは、行政区域を超えた広域の、基本的には個人のつながりに根ざしたネットワークによる活動である。行政と市民の協働という概念が、空間的にもつながり的にも変化しているのではないか。そしてその成果は、単にある空間の整備という写真に映りやすい形ではなく、行き交う人びとや風や水といった、そこに流れる時間を共有しないと伝わりづらい価値として創造されているのではないか。そういった活動に個人的には今後も期待してきたい。

田村　美幸　委員

今回の審査の際に特に留意したのは、「地域活動の関わり及びその結果が、地域の魅力を創る社会資本となっているか」という点である。「手づくり郷土賞」の原点に戻って考えてみると、選定評価の第一に挙げられてもいるように、活動の結果が地域の魅力的な景観に寄与しているかが大切なポイントである。

例えば今回の入賞事例の中の「釈迦内上中通り・親水公園」は、劣悪な負の環境であった泥沼を、地域住民の手でただ清掃するだけではなく、プラスの環境に再生して、コミュニティの場所に整備している。また「市民で育てる100年の森・こんぶくろ池公園」でも、昔は大切にされていた池を、清掃・整備を繰り返すことにより再生し、その名が示す通りの、森と湧水を保全した自然博物公園に発展させた。「中山道鵜沼宿～人と人とのつながりを目指して」では、会議を重ねて「歩行者優先の道路」をまちづくりのコンセプトに、数々の創意工夫で道路整備をした…等々。その他の事例においても、住民の創意工夫によるまちづくりの結果、後世に引き継いでゆける、見て美しく立派な社会資本を作り上げている。そして地域の人々のその資源への熱い想いが感じられるのである。

藤吉　洋一郎　委員

これまでの受賞作品を振り返ると、「手づくりの郷土」とはどのようなものを指すのか、時代とともに変わってきているのがわかる。例えば本賞への応募作品にどのようなものが多いかを見ると、近年は社会資本投資そのものが急激な低落傾向を続けているのとは対照的に、地域での住民参加が社会資本の整備や維持管理、さらには日常の利活用にと、着実に進展してきていることがうかがえる。自然や歴史を大切に守りながら、地域の未来につなげたいという地域の人々の願いによる根気強い働きかけが、行政

を動かしているのだ。とくに今年の応募作の中には、そのような地域のみなさんの取り組みが伺えるものが数多く見受けられたのは大変いいことだと思う。

社会資本は作り上げればもうおしまいというのではなく、少しでも長く利用し、活用し続けられるように工夫していく、そんな郷土の社会資本づくりをこれからも望みたい。

森反　章夫　委員

選定委員を拝命し、初めての選定作業は難行した。応募されたまちづくり活動はどれをとっても「見事」とひざをたたく所業であると思えたからだ。当方が明確な判断基準と差別化の基準を持たなければ「礼」を失することになると思い至る。

社会学者としては、住民活動の協働の強度と、その活動が拓く協働の広がりに着目することにした。しかし、それでもなお、十分に絞り切ることは困難であった。まさに、当方の選別眼が試されていると考えざるを得ない。こうして、協働の強度と広がりの形成、そして持続の担保の仕方にこそ、まちづくりの核があると決める。だが、それだけではまだ選別できない。途方に暮れつつ考える。こうして、まちづくりの核はまさに「郷土」と言われる地域の集合的な記憶の甦りと再生を繰り返すことであると思われた。それが妥当な判定なのか、この問いに答えは出ていない。

受賞をのがした活動にも可能性を秘めたまちづくり活動がある。いよいよ精進し、原石を磨きあげて、捲土重来を期して頂きたい。